

雅歌

第一章一これはソロモンの雅歌なり二ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんことなり 汝の愛は酒よりもまさりぬ三なんぢの香膏は其香味たへに馨しくなんぢの名はそがれたる香膏のごとし 是をもて女子等なんぢを愛す四われを引きたまへわれら汝にしたがひて走らん 王われをたづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたたふ 彼らは直きころをもて汝を愛す五エルサレムの女子等よわれは黒けれどもなほ美はしケダルの天幕のごとくまたソロモンの帷帳に似たり六われ色ろきが故に日のわれを焼たるが故に我を視るなかれわが母子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき七わが心の愛する者よなんぢは何處にてなんぢの群を牧ひ 午時いつこにて之を息まするや 請ふわれに告よなんぞ面を覆へる者の如くしてなんぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや 八婦女の最も美はしき者よなんぢ若しらずば群の足跡にしたがひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔羊を牧へ九わが佳耦よ 我なんぢをパロの車の馬に譬ふ一〇なんぢの臉には鏈索を垂れなんぢの頭には珠玉を陳ねて至も美はし二われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんぢのために造らん三王其席につきたまふ時わがナルダ其香味をい

だせり三わが愛する者は我にとりてはわが胸のあひだにおきたる没薬の袋のごとし四わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコベルの英華のごとし五ああ美はしきかなわが佳耦よ ああうるはしきかななんぢの目は鴿のごとし六わが愛する者よ ああなんぢは美はしくまた樂しきかなわれらの牀は青緑なり七われらの家の棟梁は香柏その垂木は松の木なり第二章一われはシャロンの野花谷の百合花なり二女子等の中にわが佳耦のあるは荆棘の中に百合花のあるがごとし三わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし我ふかく喜びてその陰にすわれりその實はわが口に甘かりき四彼われをたづさへて酒宴の室にいれたまへりその我上にひるがへしたる旗は愛なりき五請ふなんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ 林檎をもて我に力をつけよ 我は愛によりて疾わづらふ六彼が左の手はわが頭の下にありその右の手をもて我を抱く七エルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ八わが愛する者の聲きこゆ 視よ 山をとび 岡を躍りこえて来る九わが愛する者は獐のごとくまた小鹿のごとし 視よ 彼われらの壁のうしろに立ち 窓より覗き 格子より窺ふ一〇わが愛する者われに語りて言ふわが佳耦よわが美はしき者よ 起ていできたれ二 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみてはやさりぬ三 もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへづる時すでに至り 班鳩の聲わ

れらの地(ち)にきこゆ三 無花果樹(いちじくのき)はその青き果(み)を赤らめ葡萄(ぶどう)の樹(き)は花(はな)さきてその馨(かぐ)はしき香氣(にほひ)をはなつわが佳耦(とこ)よわが美(うつく)しき者(もの)よ起(た)ちて出(いで)きたれ四 磐間(いはま)にをり斷崖(たけがけ)の匿(かく)處(ところ)にをるわが鴿(はと)よわれに汝(なんぢ)の面(かほ)を見(み)させよなんぢの馨(かぐ)をきかしめよなんぢの聲(こゑ)は愛(あい)らしくなんぢの面(かほ)はつるはし五 われらのために狐(こ)をとらへよ彼の葡萄園(ぶどうの園)をそこなふ小狐(こぎつね)をとらへよ我等(われら)の葡萄園(ぶどうの園)は花盛(はなまかり)なればなり一六 わが愛(あい)する者(もの)は我(われ)につき我(われ)はかれにつく彼は百合花(ゆかり)の中(なか)にてその群(むれ)を牧(か)ふ一七 わが愛(あい)する者(もの)よ日の涼(すず)くなるまで影(かげ)の消(き)るまで身(み)をかへして出(いで)ゆき荒(あ)き山(やま)々(やま)の上(うへ)にありて獐(しか)のごとく小鹿(こしか)のごとくせよ

第三章 一夜(よる)われ床(とこ)にありて我(わが)心の愛(あい)する者(もの)をたづねしが尋(たづ)ねたれども得(え)ず二 我(わが)おもへらく今(いま)おきて邑(まち)をまはりありきわが心の愛(あい)する者(もの)を街衢(ちまた)あるひは大(おほ)路(ぢ)にてたづねんと乃(すなは)ちこれを尋(たづ)ねたれども得(え)ざりき三 邑(まち)をまはりありく夜巡(よまはり)者(もの)らわれに遇(あ)ひければ汝(なんぢ)らわが心の愛(あい)する者(もの)を見(み)しやと問(と)ひ四 これに別(わか)れて過(あ)ゆき間(ま)もなくわが心の愛(あい)する者(もの)の遇(あ)ひれば之(これ)をひきとめて放(はな)さず遂(つい)にわが母(はは)の家(いへ)にともなひゆき我(わが)を産(う)みし者(もの)の室(むろ)にいりぬ五 エルサレム(エルサレム)の女子(むすめ)等(ら)よ我(われ)なんぢらに獐(しか)と野(の)の鹿(しか)とをさし誓(ちか)ひて請(こ)ふ愛(あい)のおづから起(た)ちる時(とき)まで殊更(ことごと)くに喚(こゑ)起(た)し且(かつ)醜(みにく)すなかれ六 この没藥(むつやく)乳香(にじやう)など商人(あひむ)のもろもろの薰物(かきもの)をもて身(み)をかをらせ煙(けむり)の柱(はしら)のごとくして荒野(あれの)より來(きた)る者(もの)は誰(たれ)ぞや七 視(み)よこはソロモン(ソロモン)の乘輿(のり)にして勇士(ゆうし)六十(にん)人(にん)その周圍(まわり)にありイスラエル(イスラエル)の勇士(ゆうし)なり八

みな刀劍(つるぎ)を執(と)り戰鬪(たたか)ひを善(よく)す各人(おの)腰(こし)に刀劍(つるぎ)を帶(お)ひて夜の警誠(いましめ)に備(そな)ふ九 ソロモン王(わう)レバノン(レバノン)の木(き)をもて己(おの)のために輿(こし)をつくれり一〇 その柱(はしら)は白銀(しろがね)その欄杆(らんかん)は黄金(こがね)その座(ざ)は紫色(むらさき)にて作りその内部(うち)にはイスラエル(イスラエル)の女子(むすめ)等(ら)が愛(あい)をもて繡(あ)むる物(もの)を張(はり)つく一シオンの女子(むすめ)等(ら)よ出(いで)たりてソロモン王(わう)を見(み)よかれは婚姻(こんいん)の日(ひ)心の喜(よろこ)ぶる日(ひ)にその母(はは)の己(おの)にかつぶらし冠冕(かんむり)を戴(いた)り

第四章 一 ああなんぢ美(うつく)しきかなわが佳耦(とこ)よああなんぢづるはしきかななんぢの目(め)は面帕(かほおほ)のうしろにありて鴿(はと)のごとしなんぢの髪(かみ)はギレアデ山(ギレアデ山)の腰(こし)に臥(ふ)したる山羊(やぎ)の群(むれ)に似(に)たり二 なんぢの齒(は)は毛(け)を剪(き)りたる牝羊(めひつじ)の浴場(あらいば)より出(いで)たるがごとしおのおの雙子(ふたご)をつみてひとつも子(こ)なきものはなし三 なんぢの唇(くちべ)は紅色(くれなゐ)の線維(いと)のごとくその口(くち)は美(うつく)しなんぢの頬(ほ)は面帕(かほおほ)のうしろにありて石榴(ざくろ)の半片(かたわれ)に似(に)たり四 なんぢの頸項(うなじ)は武器庫(ぶきくら)にて建(た)てるダビデ(ダビデ)の成樓(やぐら)のごとしその上(うへ)には一千(いっせん)の盾(かた)を懸(かけ)け列(り)ぬみな勇士(ゆうし)の大楯(おほたて)なり五 なんぢの兩乳房(もちちち)は牝獐(めじか)の雙子(ふたご)なる二箇(ふたつ)の小鹿(こしか)が百合花(ゆかり)の中(なか)に草(くさ)はみをるに似(に)たり六 日の涼(すず)くなるまで影(かげ)の消(き)るまでわれ没藥(むつやく)の山(やま)また乳香(にじやう)の岡(おか)に行(ゆ)く七 わが佳耦(とこ)よなんぢはことごとくうるはしくしてすこしのきずもなし八 新婦(しんよめ)よレバノン(レバノン)より我(われ)にともなへレバノン(レバノン)より我(われ)にともなへレバノン(レバノン)の巔(いただか)セニル(セニル)またヘルモン(ヘルモン)の巔(いただか)より望(み)獅子(しし)の穴(あな)また豹(はう)の山(やま)より望(め)ぬわが妹(いも)わが新婦(しんよめ)よなんぢはわが心を奪(うば)へりなんぢは只(ただ)一目(ひとみ)をもてまた頸玉(くびたま)の一(ひと)をもてわが心(こころ)をつばへり二 わが妹(いも)

わが新婦よなんぢの愛は樂しきかななんぢの愛は酒よりも遙
にすくれなんぢの香膏の馨は一切の香物よりもすくれたり二
新婦よなんぢの唇は蜜を滴らすなんぢの舌の底には蜜と乳と
ありなんぢの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし三 わが妹
わがはなよめよなんぢは閉たる園閉たる水源封じたる泉水の
ごとし三 なんぢの園の中に生いづる者は石榴及びもろもろの
佳果またコペル及びナルダの草四 ナルダ番紅花萱蒲桂枝さ
まざまの乳香の木および没藥蘆薈一切の貴とき香物なり五 な
んぢは園の泉水活る水の井レバノンよりいづる流水なり六 北
風よ起れ南風よ來れ我園を吹てその香氣を揚よねがはくは
わが愛する者のおが園にいりきたりてその佳き果を食はんこ
とを

第五章一 わが妹わがはなよめよ 我はわが園にいりわが没藥と
薰物とを採りわが蜜房と蜜とを食ひわが酒とわが乳とを飲り
わが伴侶等よ請ふ食へわが愛する人々よ請ふ飲あけよ二 われ
は睡りたれどもわが心は醒みたり時にわが愛する者の聲あり
即はち門をたたきていふわが妹わが佳耦わが鴿わが完きもの
よわれのために開けわが首には露滿ちわが髪の手には夜の
點滴みてりと三 われすでにわが衣服を脱りいかにまた着るべき
已にわが足をあらへりいかにまた汚すべき四 わが愛する者戸の
穴より手をさしいれしかばわが心かれのためにうごきたり五 や
がて起いでてわが愛する者の爲に開かんとせしとき 没藥わが

て手より没藥の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにした
たれり六 我わが愛する者の爲に開きしにわが愛する者は已に退
き去りぬさきにその物いひし時はわが心さわぎたり我かれを
たづねたれども遇す呼たれども答應なかりき七 邑をまはりあり
く夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが
上衣をはぎとれりハ エルサレムの女子等よ 我なんぢらにかたく
請ふもしわが愛する者には汝ら何とこれにつくべきや 我
愛によりて疾わづらふと告よ九 なんぢの愛する者は別の人の愛
する者に何の勝れるところありや 婦女の中のいと美はしき者
よなんぢが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところ
ありて斯われらに固く請ふや一〇 わが愛する者は白くかつ紅に
して萬人の上に越ゆ二 その頭は純金のごとくその髪はふさや
かにして黒きこと鳥のごとし三 その目は谷川の水のほとりに
をる鴿のごとく乳にて洗はれて美はしく嵌れり三三 その頬は馨
しき花の床のごとく香草の壇のごとしその唇は百合花のごと
くにして没藥の汁をしたたらす四 その手はきばみたる碧玉を
嵌し黄金の釧のごとく其軀は青玉をもておほひたる象牙の
彫刻物のごとし五 その脛は蠟石の柱を黄金の臺にてたてる
がごとくその相貌はレバノンのごとくその優れたるさまは
香柏のごとし六 その口ははなはだ甘く誠に彼には一つだにう
つくしからぬ所なしエルサレムの女子等よこれぞわが愛する
者これぞわが伴侶なる

第六章 一 婦女のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしやなんぢの愛する者はいつこへおもむきしやわれら汝ともたつねん二わが愛するものは己の園にくだり 香しき花の床にゆき園の中にて群を牧ひまた百合花を探る三我はわが愛する者につきわが愛する者はわれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ四わが佳耦よなんぢは美はしきことテルザのごとく華やかなることエルサレムのごとく 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし五なんぢの目は我をおそれしむ 請ふ我よりはなれしめよなんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり六なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとしおのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし七なんぢの頬は面帕の後にありて石榴の半片に似たり八 后六十人 妃嬪八十人 數しられぬ處女あり九わが鶴わが完き者はただ一人のみ 彼はその母の獨子にして産たる者の喜ぶところの者なり 女子等は彼を見て幸福なる者となへ 后等 妃嬪等は彼を見て讚む一〇この晨光のごとくに見えわたり 月のごとくに美はしく 日のごとくに輝やき 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき 者は誰ぞや二 われ 胡桃の園にくだり ゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽しし石榴の花や咲しと見返しをりしに三 意はず 知す 我が心われをしてわが貴とき民の車の中間にあらしむ三 歸れ 歸れ シュラミの婦よ 歸れ 歸れ われら 汝を觀んことをねがふな んぢら何とて マハナイムの跳舞を觀ることくに シュラミの婦を

觀んとねがふや

第七章 一 君の女よなんぢの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな 汝の腿はまろらかにして玉のごとく 巧匠の手にて作りたるがごとし二なんぢの臍は美酒の缺ることあらざる 圓き杯盤のごとくなんぢの腹は積かさねたる麥のまはりを百合花もてかこめるが如し三なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿のごとし四なんぢの頸は象牙の成樓の如く 汝の目はヘシボンにて パテラビムの門のほとりにある池のごとくなんぢの鼻はダマスコに對へるレバノンの成樓のごとし五なんぢの頭はカルメルのごとくなんぢの頭の髪は紫花のごとし 王その垂たる髪につなされたり六ああ愛よもろもろの快樂の中にありてなんぢは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな七なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しくなんぢの乳房は葡萄のぶさのごとし八 われ 謂ふこの棕櫚の樹にのぼりその枝に執つかんとなんぢの乳房は葡萄のぶさのごとくなんぢの鼻の氣息は林檎のごとく匂はん九なんぢの口は美酒のごとしわが愛する者のために滑かに流れくだり 睡れる者の口をして動かしむ一〇 われはわが愛する者につき彼はわれを戀したふ二 わが愛する者よわれら 田舎にくだり 村里に宿らん三 われら 夙におきて 葡萄や芽しし 荅やいでし 石榴の花やさきし いざ 葡萄園にゆきて 見んかしこにて 我わが 愛をなんぢにあたへん三 戀加かくはしき 香氣を發ち もろもろの 佳き 果物古き 新らしき 共に わが 戸の上 にあり わが 愛する 者

よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章 ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことをわれ戸外にてなんぢに遇ふとき接吻せん然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじニわれ汝をひきてわが母の家にいたり汝より教晦をつけん我がくはしき酒石榴のあまき汁をなんぢに飲しめんニかれが左の手はわが頭の下にありその右の手をもて我を抱く四エルサレムの女子等よ我なんぢ等に誓ひて請ふ愛のおのつから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ五おのれの愛する者に倚かかりて荒野より上りきたる者は誰ぞや林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませりなんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなしなんぢを産し者かしこにて劬勞をなしぬ六われを汝の心におきて印のごとくしなんぢの腕におきて印のごとくせよ其の愛は強くして死のごとく嫉妬は堅くして陰府にひとしその焔は火のほのほのごとしいとまげしき焔なり七愛は大水も消ことあたはず洪水も溺らすことあたはず人その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとすると尚いやしめらるべし八われら小さき妹子あり未だ乳房あらずわれらの妹子の問聘をつくる日には之に何をなしてあたへんや九かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん彼もし戸ならんには香柏の板をもてこれを圍まん一〇われは石垣わが乳房は成樓のごとし是をもてわれは情をかうむれる者のごとく彼の目の前にありき一 パアル八モンにソ口

モンの葡萄園をもてりこれをその守る者等にあづけおき彼等をしておのおの銀一千をその果のために納めしむニわれ自らその有なる葡萄園われの手にありソ口モンなんぢは一千を獲よその果をまもる者も二百を獲べしニなんぢ園の中に住む者よ伴侶等なんぢの聲に耳をかたむく請ふ我にこれを聽しめよ一四わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ香はしき山々の上において獐のごとく小鹿のごとくあれ